

自己評価および外部評価結果

[セル内の改行は、(Altキー)+(Enterキー)です。]

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I. 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	月一回のフロア会議や日々のミーティングの際、理念に基づいたケアが行えているか話し合っている。新人、中途採用者の職員研修において、理念について学ぶ機会を持ち、意識付けを行っている。	「最後までこの野村の地域で自分らしく暮らす」をモットーに、新人研修時、理事長や事務長から理念についての講義があり意識づけをしている。第3火曜日、19時30分～21時30分にフロア会議を実施しており、理念に基づいたケアを実践しているかを話し合い研鑽に努めている。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	市役所へ千羽鶴を届けた。常会に加入し回覧板を回していただいたり、三九郎や夏祭り、文化祭などの地域行事に参加している。雑巾縫いを日頃から行い、幼稚園、小学校、中学校へ届けた。地域の方から、野菜や果物、タオルなどをいただいたりしている。買い物や散歩に出掛け、地域の方と挨拶を交わしたり、お花をいただいたりしている。夏休みには駐車場で小学校のラジオ体操が行われている。	地域の祭りや行事に参加している。利用者の刺し子の作品を地域の文化祭に出品している。千羽鶴を折り原爆記念式典に参加する中学生に託し、その後、参加した中学生が報告に来訪し相互交流も図っている。利用者の縫った雑巾を幼稚園や小学校、中学校へと届けている。小・中学校の廃品回収にも協力しており、地域との関わりが広がっている。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	中学校の職場体験学習、福祉の職場体験事業、実習生(四校)の受け入れを積極的に行っている。施設長が松本広域連合介護認定審査会委員をやっている。また、製薬会社の勉強会に講師として出掛けた。松本・塩尻地区認知症講演会の基調講演を行った。こまくさ祭りで、地域の方々に向けた講演会を行った。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	二ヶ月に一度開催している。議題に合わせて地域の方々や防災や事故、犯罪また高齢者に向けたサービスなど様々な意見交換を行い、サービスの向上に努めている。前年度同様の出席者に加え、小学校のPTAや市役所の広丘支所長、訪問販売のパン屋にも参加していただいた。	偶数月に年6回開催している。区長、民生委員、ボランティア等、地域の方の参加が多い。毎回テーマを決め、警察署員、消防署員、小中学生の保護者、近所のスーパーや出入りのパン屋の従業員等、生活に直結している方々に参加を依頼している。双方向での話し合いを行い、いただいた意見をケアに活かしている。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	市の介護相談員が2～3か月に一度来訪し、利用者や職員と交流を図っている。運営推進会議に出席していただき、グループホームの実情やケアの取り組み等を伝えている。認定更新や変更申請の機会に市町村担当者と連携を深めている。地域包括支援センターの職員が研修に来ている。	介護相談員が定期的に来訪し交流している。市主催の事業所会議に参加し課題を通して交流している。地域包括支援センターや法人クリニックに「こまくさ便り」を置き地域の方々にも見ていただけるようにしている。施設長が認知症サポート医師として市主催の講演会の講師を務めたこともある。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	日中は玄関の鍵は開錠している。屋上やベランダに出で気分転換を図ったり、エレベーターで一階へ下り、新聞を取りに行く利用者もいる。身体拘束につながるケアを行っていないか、フロア会議やミーティングの際にケアの見直しを行っている。	日中は玄関の鍵は開錠している。毎日のミーティングやフロア会議等で日々のケアが拘束につながらないかを話し合っている。ベットを低床にして方が一転落しても外傷のないように考慮している。利用者の方々は落ち着いて生活しており、行動を抑制するような行為は皆無である。	

グループホームこまくさ野村

自己	外部	項目	自己評価		外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見逃されることのないよう注意を払い、防止に努めている	新人、中途採用者の職員研修において、高齢者虐待防止関連法について勉強会を行っている。虐待につながるようなケアが行われていないか、フロア会議やミーティングで話し合っている。			
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	新人、中途採用者の職員研修において、権利擁護に関する勉強会を行った。成年後見人制度のチラシを玄関に置き、家族等に情報提供している。			
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又はや改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約時には、利用料金、グループホームでの生活や医療連携体制、看取りなどについて詳しく説明を行い、利用者や家族の不安、疑問点を解消できるように努め、同意を得るようにしている。契約解除に際しても十分な説明と話し合いを行っている。			
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	運営推進会議や家族会などで利用者や家族の意見や要望を伺う機会を設け、そこで出された意見をフロア会議などで話し合い反映させている。家族来訪時には、現状報告をするとともに、ケアの方向性について、家族の思いなどを聞く機会として何でも言い易い関係作りを努めている。	利用者の9割弱の方は意見や考えを言葉で表出できる。市内在住の家族が多く毎週面会に見える方もいる。面会時に家族から意見を伺い、いただいた意見はフロア会議で話し合い運営に反映させている。家族会は2年に1回開催し、8割ほどの方が参加されている。		
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	フロア会議やミーティングの中で意見や要望、提案を聞くようにし、日頃からコミュニケーションを図るよう心掛けている。個別に職員に声を掛け、話す機会を作り、業務上の相談等に対応している。	フロア会議で気づきや改善点を話し合っている。欠席者は会議録で確認し確認印を押している。業務改善としてフロアの掃除を遅番から夜勤者に変更したこともある。また、週1回利用者の居室の清掃を障害者の作業所に依頼し清潔に努めている。理事長が随時、個別に相談にのりアドバイスもしている。		
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	代表者は現場に来て、利用者と一緒に過ごしたり、個別に職員の業務や悩みを把握するように努めている。年に数回職員による自己評価を行い、職員が向上心を持って働けるように働きかけている。			
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	外部の研修になるべく多くの職員が受講できるように情報を収集し、発信している。また参加した研修報告は法人リーダー会議で伝達講習し、研修報告書を全員が閲覧出来るようにしている。			
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	研修や事例検討を通して、他事業所と交流する機会を持ち、質の向上に励んでいる。法人内の別のグループホーム同士でも、リーダー会議や運営推進会議を通して情報交換を行っている。			

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
Ⅱ. 安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	サービス利用の相談があった時、利用者や家族と事前面談を行い、状態を把握するように努め要望や不安を理解し、安心していただけるよう努めている。利用者によっては入居予定日前から、同じ施設内のデイサービスやショートステイ利用時にグループホームに来ていただき、安心していただけるように努めている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	家族には入居前にグループホームの様子を見ていただきサービス利用状況やこれまでの家族の苦労などをゆっくりとお聞きし理解した上で、入居されてからの不安や要望についてどのように対応できるか話し合っている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	サービス利用の相談時、本人や家族の状況をよく聞き、グループホームとして、どのような支援ができるか考え、必要に応じてケアマネージャーや地域包括支援センターに繋げるなどの対応をしている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	職員と利用者は、一緒に暮らす仲間として、喜びや楽しみ、不安や哀しみ、こだわりなどを共有し、支え合える関係作りに努めている。また畑仕事や煮物、漬物、裁縫、干柿作りなど教えていただく機会が多い。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	本人の日頃の状態をこまめに報告、相談し支援の方法について共に考えている。誕生日会やこまき祭りに参加していただき家族が本人や他の利用者と同様の場面作りをしている。利用者の娘さんに花瓶敷を編みプレゼントしたり、妹さんが誕生日会に出席したりした。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	行きつけの床屋、美容院、歯医者に行かれたり、娘さんと温泉へ外出されたり、自宅のある地区のお祭りへお嫁さんと外出したり、亡くなられた奥様の一周忌の法要やお墓参りに出掛けたりしている。友人、知人、兄弟姉妹、親戚等の来訪や電話の取次ぎなど馴染みの関係が継続できるように支援している。	法人内のデイサービス利用者と一緒にリハビリ体操をする時間があり、その時、自宅の近所の方と話す機会もある。馴染みの理美容院や商店へ家族と共に出かけている利用者もいる。年賀状や母の日のプレゼントのお礼を書いて投函する方の支援も実施している。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せず、利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	個別に話を聞いたり、相談にのったり、皆で楽しく過ごせる場面作りや、一人ひとりが役割を持った活動を通して利用者が孤立せず、利用者同士の関係が上手くいくように職員が調整役となって支援している。		

グループホームこまくさ野村

自己	外部	項目	外部評価	
			自己評価 実践状況	実践状況 次のステップに向けて期待したい内容
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	広報誌や写真を送ったり、日用品をいただいたり、ご家族がボランティアとして施設で演芸を披露して下さったりしている。	
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント				
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	日々の関わりの中で、表情や言動などから本人の思いや希望、意向を汲み取るように努めている。把握が困難な場合は、家族や入居前に利用していた事業所から情報を得て、本人本位の視点に立って検討している。	利用者の8割以上の方は自分の思いや意向を言葉で表現できる。困難な方には選択しやすい質問をしたり、表情やしぐさで判断している。集団の中では表現しづらい様子が見える時は自室において1対1で関わり把握に努めている。本人の意思を尊重した対応を常に心掛けている。
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	プライバシーに配慮しつつ、利用者一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、個性や価値観、利用の経過等を本人、家族から詳しく話をお聞きし、情報を得るようにしている。また他事業所利用時の様子などを教えてもらえるように連携を図っている。	
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	利用者一人ひとりの生活リズムや暮らし方の把握に努めている。日々の支援からその方が今できることに注目し、一人ひとりの有する力の把握に努めている。	
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	本人や家族との日々の関わりの中で思いや要望を聞き、介護計画に反映するようにしている。またフロア会議や日々のミーティングの中でモニタリングやカンファレンスを行っている。状態が変化した場合は検討し変更できるように努めている。	担当制を実施しており、職員は1~2名の利用者を受け持っている。介護計画書は担当者が素案を考え、ケアマネージャーと共に計画を作成し、フロア会議にて意見交換し確認をしている。毎日のミーティングでモニタリングやカンファレンスを行っている。状態の変化に応じて評価も行っている。変化のない場合は3ヶ月毎に評価している。
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	個別にファイルを用意し、食事、水分、排泄等身体状況や日々の暮らしの様子や本人の言葉、エピソード、職員の気づき等を記録している。出勤時に記録を確認し、情報を共有している。個別の記録をもとに介護計画の評価、見直しを行っている。	
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	本人、家族の状況に応じて通院の付き添いや送迎、個別的な買い物や支援など必要な支援を柔軟に対応し個々の満足度を高めるように努力している。家族がグループホームに泊まれ、一緒に看取りの時間を過ごした。	
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	利用者が地域で安心して暮らし続けられるよう、警察、消防、教育機関、民生児童委員、近隣スーパーマーケット、薬局、包括支援センター、地域住民に運営推進会議へ出席していただき、意見交換、協力関係を築いている。こまくさ祭りや行事の際に地域のボランティアの協力を得ている。	

グループホームこまき野村

自己	外部	項目	外部評価		
			自己評価 実践状況	実践状況 次のステップに向けて期待したい内容	
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切にし、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	本人、家族の希望に応じて、全ての利用者が法人内のクリニックをかかりつけ医としている。必要時に連絡をとりあい、看護師が状態を診にきてくれることもある。歯科医、眼科医などの受診は家族同行が基本だが、不可能な場合、職員が代行している。歯科医が往診に来ることもある。	利用者の希望で法人のクリニックをかかりつけ医としている。月に1回定期受診がある。常に連絡を取り合い、必要時は看護師が状態把握に来訪する。医師との連携は24時間可能である。歯科と眼科の受診は原則、家族が同行している。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	状態変化や異常を見逃さないように努めている。体調や表情の変化等で気付いたことがあれば、速やかに看護師に報告し適切な医療に繋げている。24時間いつでも看護師に相談できる体制になっている。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	ここ二年間入院された利用者はいないが、入院された場合、利用者の情報などを医療機関に提出し、職員も頻回に見舞いに伺うようにしたい。ご家族とも早期退院に向け、相談や話し合いを行っていきたい。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	重度化した場合、早い段階から医師と家族の面談の機会を設けている。本人、家族の意向を伺い、最後の時をその人らしく過ごしていただけるよう、医師、看護師、介護員で話し合い連携を図り対応している。開設以来9名の方をホームで家族と共に看取る事例を経験した。重度化や終末期ケアは大変難しくさらに学んでいきたい。	本人や家族の意向を尊重し対応している。「住み慣れた所で最後を」との思いで終末期ケアを実践している。医療・介護の連携を図り24時間対応で家族とともに開設以来9名の方を看取ることができた。利用者の方々も一緒に手を合わせ、最後のお見送りをしているという。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	新人、中途採用者の職員研修において、急変や事故発生時の対応について研修を行っている。フロア会議やミーティングの場で、実際に起きた事故の対応や予測される事故、急変についての対応を検討し現場での実践につなげるようにしている。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	日中、夜間を想定した避難訓練を年二回行っている。日中を想定した避難訓練では、近隣住民、民生児童委員、消防署の協力を得て消火器と散水栓を用いた初期消火訓練を行った。	年2回実施している。1回は夜間を想定して行っている。夜勤者1人で屋上へ避難させるのは困難を極めたという。初期消火の大切さといかに早く応援の人を集めるかが重要で、その訓練も実施している。日中を想定した訓練には地域の方も参加している。	
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	本人の気持ちを尊重しながら、職員は人生の先輩として尊敬する姿勢を持って接している。さりげないケアを心掛けたり、慣れ合いのケアにならないよう気を付けたり、自己決定しやすい声掛けをするように努めている。利用者の尊厳や個人情報保護の理解の向上に努めている。	姓にさんづけで呼んでいる。人生の先輩として尊敬の念を持って接している。入職時には個人情報保護やプライバシーの尊重に関する研修を実施している。マニュアルも常備している。不適切と思われる対応がある場合は理事長や管理者が個別に指導したり、フロア会議の議題にあげ話し合っている。	

グループホームこまきさ野村

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	利用者一人ひとりの状態に合わせて声を掛け、答えやすく選びやすいような支援をしている。些細なことでも自分で決める場面作りを心掛けている。表現が困難な方に対しては、表情や行動などから本人の意向を汲み取り、支援している。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	利用者一人ひとりの体調に配慮しながら、一人ひとりのペースを大切に、その日その時の気持ちを尊重し、その人らしく生活ができるよう支援している。また本人のサインを読み取り、休息場面を作るなど個別対応に努めている。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	着替える際は、その方が好きな色や形の服を選んでいただいている。その方が馴染んだ髪型やお化粧ができるように支援している。帽子やスカーフ、手袋などその方の個性に添った支援を心掛けている。家族と馴染みの床屋や美容院へ出掛け、お気に入りの髪型にカットしたり、パーマをかけたり、髪の毛を染めたりしている利用者もいる。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	食事の準備から片付けまで出来る範囲で役割を持ち、職員と一緒に楽しみながら行っている。ホームの夏祭りで、ホットプレートを使い焼肉会を行った。畑で収穫された野菜などで、煮物や漬物を調理したり、利用者の馴染みの料理や好きな料理を作り、個々の力を活かしながら楽しみとなるよう努めている。誕生日会では、本人の希望のメニューを調理しお祝いしている。二名の利用者が、毎晩晩酌を楽しんでいる。	ほとんどの方は自力摂取が可能である。全介助の方は1人である。ソフト食の方が3人で他の方は普通食を食されている。副菜は法人内の給食室で作られているが、畑で収穫した野菜や頂き物の野菜を利用して利用者が中心になり煮物を作っている。片づけやお米をとぐことを自ら行っている方もいた。大根を漬けたり、蕎麦饅頭を作りおやつに食べたりと、利用者が活躍する場面が沢山準備されている。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	チェック表を利用し、水分量、食事量の把握をしている。個別に高カロリー補食品を提供しているが、これだけに頼らず、一人ひとりの嗜好や食事形態をソフト食にするなどして提供している。月一回栄養士が訪問し、一緒に食事をしながらアドバイスを受けている。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	利用者一人ひとりの能力に応じた対応を行っている。特に就寝前の口腔ケアはその重要性を理解した上で確実に行っていただけるよう支援している。利用者によっては、スポンジやガーゼなどを使用し、毎食後の口腔ケアを行っている。		

グループホームこまき野村

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	個々の排泄パターンを把握し、身体機能に応じて、その方に合った排泄ケアを行っている。自尊心や羞恥心に配慮し、さりげない声掛けや誘導を心掛け、トイレでの排泄を大切に支援を行っている。本人の状態に合わせて、パンツやパッドの種類の検討を行っている。オムツの勉強会を行ったり、ケアアドバイザーの方に困っていることなどを相談して解決している。	布の下着を着用し自立の方が2人、他の方は何らかの援助を必要としている。排泄チェック表を用いて排泄パターンを把握し、できるだけトイレで排泄できるよう声がけ、誘導をしている。本人の状態に合った下着やパッドを選択できるように勉強会も実施している。人前で失敗した様子の見られる時には自室やトイレに誘導し対処している。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	排泄チェック表を使用し、便秘の方にはおやつ等で食物繊維の多い物、乳製品等を摂っていただくよう工夫している。また腸の働きを良くするため、マッサージやカイロ、毎日の散歩や体操、階段昇り等体を動かす場面を作っているが下剤を使用する方多くなっている。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	利用者の希望を確認し、できるだけ利用者の希望に添った支援を行っている。入浴を拒む利用者に対しては、言葉掛けや対応を工夫し、利用者一人ひとりに合わせた入浴を心掛けている。入浴を楽しめるようゆず湯や菖蒲湯を行ったり、入浴剤を使用している。岡谷市の足湯へ出掛けることもある。	利用者の希望に添って入浴していただいている。少なくとも週2回は入浴できるよう声がけをしている。入浴を拒否される方には、時間や日を変えたり介助者を替えて勧めている。全介助の方が5名、そのうち職員二人での介助を必要とする方が1名おられる。外出をかねて近隣の足湯に出かけることもある。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	午前中散歩に出掛け日光を浴び、午後は体操などを行い生活リズムを整え、夜間の安眠につなげられるよう心掛けている。眠れない方には、会話をしたり、温かい飲み物をお出ししたり、足浴を行う等の対応をしている。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	個別に服薬ファイルを作成し、全職員が把握できるようにしている。服薬は個別に対応し、内服できているか確認している。処方の変更や追加があった場合は申し送りノートや個人記録に記録したりミーティングで話し合ったりして状態変化の観察に努めている。フロア会議などで薬に対する理解を深めている。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	畑仕事や洗濯物干し、洗濯物たたみ、食器洗い、お椀拭き、新聞たたみ、刺し子、雑巾縫い、花の苗植え、水やり、編み物、掃除など得意なことや利用者の経験や知恵を発揮できる場面を多く作り、その都度感謝の言葉を伝えるようにしている。行事や外出、誕生日会など利用者と相談しながら計画している。		

グループホームこまくさ野村

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	施設の周囲や近所の公園などへの散歩は午前中の日課になっている。近所のスーパーや薬局などへも積極的に外出している。花見、薔薇園見学、葡萄狩り、紅葉狩り等へも出掛け、四季を感じていただけるようにしている。	利用者5人に職員2人が付き添い、施設の周囲や近所の公園などへ散歩に出かけている。近所のスーパーや薬局へも買い物や処方された薬を取りに行くなど、外出の機会を作っている。自力歩行の方3人、車椅子の方2人、他の方も何らかの補助具を必要としている。年間計画に季節毎の外出が計画されていて花見やブドウ狩りなどを楽しんでいる。	
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	家族の協力を得て、個人の財布を持っている利用者もあり、買い物に出掛けた際、飴や菓子、化粧品などちょっとした買い物を楽しんでいる。施設でお金を管理している方でも、代金を直接支払ったりすることで安心感や満足感が得られるように配慮している。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	利用者の希望で、本人が家族へ電話を掛けたり、家族からの電話を取り次いだり、プライバシーに配慮しながら個別に対応している。家族に絵手紙やプレゼントをもらった御礼の手紙を出したりした。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	利用者にとっての馴染みの物、生活感や季節感のある物を配置し、家庭的な雰囲気作りに努めている。刺し子や絵など利用者の作品を飾ったり、季節にあった花を飾るなどして、居心地の良い家庭的な雰囲気作りに努めている。	利用者手作りの刺し子の作品が額に入れて飾られている。毎月の絵手紙教室や2ヶ月に1度の折り紙教室を開いており、その作品も展示されていた。各自の居室の入り口には好みの暖簾が掛けられていて明るく穏やかな雰囲気を作り出している。畳のスペースには炬燵があり居心地の良い空間となっている。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	リビングにはソファ、畳スペースには炬燵があり、気の合った利用者同士が座って話ができたり、休みたいときには横になったりできる場所となっている。廊下や屋上には椅子を置き、景色を眺めたり、一人で過ごせる場所となっている。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	馴染みの家具やテレビ、寝具など好みの物を自由に持ち込んでいただいている。家族の写真や利用者が作った作品が飾られ、利用者一人ひとりの居心地の良い空間となるよう努めている。	ベットは施設で備えつけてあり、高さが調節できるタイプの物である。寝具は好みの物を使用している。物入れも使い易さを考慮して揃えられている。手作りの作品や家族の写真を飾って個性を出している。どの居室も整理整頓が行き届いており、南向きで明るい日差しが心地良い。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	利用者の身体状況に合わせ、表示やL字バー、ポータブルトイレなど安全に安心して暮らせるよう環境整備に努めている。利用者の状態の変化により、混乱されたり、失敗が生じた時には、その原因を職員間で話し合い、本人の出来る力、分かる力に合わせた環境作りに努めている。		